
私と君と異世界と

綴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と君と異世界と

【Zコード】

Z7369S

【作者名】

綴

【あらすじ】

小さいときに見た不思議な夢をもう一度みた主人公の燐は、なぜか頭から夢の内容が離れなくなってしまう。不思議に思いつつも燐は友達と学校へ向かう。

しかし登校途中、強烈なめまいに襲われて倒れてしまう。目を覚ました燐が見たのは、日本とは違う見慣れない景色だった。

とりあえず歩いて行つた先で出会つたりイ、リアン、カイルの3人で燐を拾つてくれた商隊と共に、元の世界へ帰る方法をさがしつつ旅を始める。旅する先で燐が見るものは？夢に見た少年とは誰なの

か？燐は無事に元の世界に戻れるのか！？

「無事に帰れるかじやない。何が何でも、絶対に、帰るんだ」

「メントやアドバイス、感想等受け付けております。
よろしければ改善点などお聞かせください！
なお、この話は行き当たりばつ当たり的に進んでこります。

プロローグ

目を開けると、そこは暗闇だった。黒よりも濃く深い闇が、少女を包むように存在していた。自分以外は誰も、何もないかのような場所のはずなのに、不思議と怖さは感じなかつた。

ふと、人の声が、音が聞こえた気がした。小さすぎるのか、声ではなく音として。

「・・・・・誰か、いるの？」

思わず声をかけてしまつた少女は、音がする方へ歩き始めた。しばらく歩いて着いたところには、一人の男の子がいた。髪は肩の辺りまであり、顔はよく見えない。しかし服が王子様のような服だつたため、

(ああ、これは夢なのか)

そう思つた少女は、少年の前に座り、聞いてみた。

「どうしたの？」

「・・・・・つー？」

聞いた瞬間、驚いたようにぱっと顔を上げるので、聞いた少女も驚く。

「えつと、驚かせてごめん。いきなりで悪いんだけど、どうしたの？」そんなに、その、・・・・・泣いてるけど」

何をどう言つたらいいのか分からず歯切れの悪い聞き方をしてしまい、怪しい人を見るような目でみられる。それでも逃げずにちゃんと答える辺り、素直なのだろう。

「・・・・・逝つてしまつた人がいる。もう、会えない」

おそらく、その逝つてしまつた人というのはとても大切な人だつたのだろう。嗚咽をこらえるようにしても聞こえる微かな音が、少女の心になんともいえない感情を呼び起こさせる。

「大事な、人だつたんだね」

「ああ。とても、とても大切な人だつた」

しばらく沈黙して、座り込んでいた。それは重苦しいものではな

かつたが、少年が立ち上がったことにより、沈黙は破られた。

「俺はもう行かなければならぬ。…………そりいえば、お前の名前は？」

「お前は失礼だからやめてほしいな。私の名前は、木崎燐。きざきりん君は？」

「俺は…………つ……！」

少年が名を告げようとしたその時、いきなり突風が起つた。全てを巻き込もうとするかのように吹き荒れる風に少年の名前は聞き取れず、燐と名乗った少女は風から顔をまもるように腕で覆い、少年の方へと目を向ける。

「だ、だいじょうぶー！？」

「そこ、からつ動くなよっ」

両方の手のひらを燐に向け、ブツブツと何かを咳きだした少年の体が光がもれだすように輝き始め、その眩しさに目を開けていられなくなりギュッと目をつぶり、また目を開けた燐が見た景色は。

「私の、部屋？」

どうやら夢だつたらしい。そりいえば最初の方で夢だと認識していた。短い夢だつたはずなのに、最後の方ではすっかり忘れていた。でも、見たことのある夢だつたなあ、なんて考えながら着替えていふつちに思い出した。

「ああ、そうだ。小さいときに見た夢だ」

（一度見た夢をまた見るなんてこと、あるんだなあ）

そんなことを考えていた燐は、髪を梳かすまで気がつかなかつた。

自分の髪が、寝ているだけではありえないほどグシャグシャに絡まっていたこと。

1話 こつもの朝に、贈り物。

異常なほどボサボサな髪をブラシで梳かすたび、頭皮がひつぱら
れる痛みに若干涙目になりながらも仕度を終えた燐は朝食を食べる
ために階段を下りていく。

「…………あれ、ばあば、着たの？」

「燐がぐっすり寝てる間にね」

「そんなに怒らなくともここじゃないの。ねえ、燐。そろそろ朝飯

食べたほうがいいんじゃないかい？」

何度も起こしたのに起きないんだからー、と怒る母・杏子と、それをなだめるようにのんびりと笑う祖母・イチの声に迎えられ、おとなしく席に着く。

「いつも先に食べてていいって言つてるじゃん」

「やういうわけにはいかないの！」

プリプリと怒る母はハッパ当たりするかのように朝食に齧り付く。

「あの人、いつも不思議に思つてたんだけど。なんでお母さんは朝トーストといふ飯を食べてくワケ？ 普通はどうちかだと思つんだけど」

「お腹いっぱい食べないと元氣でないからに決まつてるじゃないの！…………って、た、大変つ。もう時間が……」

慌てふためきながら食器を片づけ、仕事へ向かおうと小走りな杏子に「いつてらっしゃーー」と声をかけると、玄関に荷物を置いた杏子はすぐこへ勢いで燐のもとへ走ってきた。

「わ、ちゅっ、何やつて……」

「……お母さん、信じてるから。絶対に、無事に帰つて来るって……

「…………」

「お母さん…………？」

「つ、・・・・・なんてね。びっくりした？　あたしの演技力はまだまだ健在ね！　つて、じ、時間時間！！」

「はあ？　つて、つもつー！　なんのよいきなり。あああもつ、なんかむかつくわー」
バタバタとわざとらしく足音をたてて出ていく杏子の後姿を田で追いながら、でも・・・・・と燐は思ひ。焼てて出て行った母の顔がチラリと見えたとき、なにかがキラリと田元で光った気がしたのだ。

（涙？　でもなんでいきなり泣きだしたりなんか・・・・・）

不思議に思いつつも時間が迫っているのは自分も同じなので、さつさと食べよう、とおかずに箸を伸ばす。

「はあー食べた食べた。んじゃ、行つてきます

「燐、ちょっと待つて」

靴を履いて振り向くと、イチが何かを手に持つてやつてくれるところだった。

「なに、どうかしたの？」

「これ」

「え？　うわ、こればあばが大事にしてるやつじやん

イチが燐に差し出したのは、小さいがキレイな宝石のついた指輪に銀色の鎖を通したネックレスだった。それは、昔死んでしまった祖父から贈られたといって大事にしていたもので、いつもはイチが首にかけている思い出のものだという。ちなみに、祖父はここ日本 の生まれではないらしく、プロポーズのとき指輪のかわりにネックレスを贈つたのだと。結婚してしばらく経つたころ、ようやく結婚指輪という存在に気づいたらしく、キレイな指輪がイチの左薬指にはまっている。

「何でこんなものを・・・・・？」

「御守りよ。貴方が無事でいられるように、くじけないでいられる

私たちよりも先に死んじやつたりしたらダメよ」

「大げさだなあ、たかが学校行くだけじやん。死にやしないつて。

ていうか、これ貰つちゃつていいの？大事にしてたんじや・・・

「いいのよ、それは最初から貴女のためにある物だから。それに私はここにいたりやんとあるわよ。おじいちゃんが同じものを2個買つていたのよ。一つは私に、もう一つは貴女に、って」

「え、おぬさんのじやなくて? うーん……じゃあ、

く貰つておくれ。じゃ、行つてやめます

「行つてみりて」

燐は一ヶ戸りと祖母の言葉に笑顔を返して玄関を出て行った。

「無事に帰つて来るのよ、燐。いつも思つてゐるからね……」

咳いたイチの目から涙が一粒零れ落ちた。ハンカチで涙を拭うと、キッチン向かつた。

「さて、洗物をしますか？」

悲しい気持ちを吹き飛ばすように元気に言つたイチの顔は、孫を案じる不安や突然の別れに対する悲しみではなく、大切な人が笑顔で帰つてこれる場所を作ろうとする笑顔が浮かんでいた。

2話 朝と、眩暈と、別れと。

「……なんだつたんだろ、お母さん。おかしいのはいつもだけど、なんか、いつもと違うような……」

最後の言葉を口には出さずに心の中で呴いた燐の体に、ドンッと大きな衝撃がはしつた。なんとか体勢をなおして振り返った背後には……

「燐つおつはよー！ あれ、なんか元気くない？」

「なんだ、万智か……」

「え、何その反応！？ 酷くないかつ」

朝から元気いっぱい、まるで小学生のような性格をした少女・万智まちはいわゆる幼馴染よなづかといつやつで、保育園から一緒に親友だ。もつとも、そんなことを言えばますます調子に乗るにちがいないから口に出さないが。

「んー、まあいいや。それよかどした？ なんか、予想外のことが起きましたっ！……みたいな顔してるけど？」

「……それがさあ、今朝起きたらなんか知んないけどお母さんとばあばが集合してたワケ。でね、まあ普通に朝ごはん食べてたんだけど。お母さんが出かけるときにちょっと様子がおかしかったんだよね。私が学校行くときなんか、ばあばがネックレスくれたし。二人とも、なんかいつもと違うっていうか……おかしいっていうの？」

そんな感じだつたんだよねえ」

燐が話し始めてから静かに聞いていた万智は、まじめな顔をして呴いた。

「やつぱり、行かなきゃいけないのか」

「は？ なんか言った？」

「え、何も言ってないよ？ 空耳じゃないの。もしかして……幽霊

つ！？」

「いやーっ、あんた私が嫌がるの知つてやつてるでしょー…」

いつもと同じように万智とふざけて、一緒に笑いあって。……その時、燐の視界が激しくゆれた。上下左右にグワングワンと脳を力任せに揺すぶられているんだじゃないかと思つついで、吐き気が襲つてきた。

「燐……？　ま、まさかもうっ！？　早すぎる……！」
「ま、ち……つ何を……何か、知つているの、ツク。は、気持ち、わる……つ何これ……！？」

混乱しつつも、突然の眩暈と吐き気に立つていられなくなつて座り込んでしまつた燐の肩を包み込むように万智は腕を回す。
「ねえ、燐。聞いて？　今から燐の右手の甲に呪を刻むね。ちょっと痛いかもしないけど、我慢してね」

「つ、え……？　い、痛つ、何を……！？　呪つて何！？」

燐の右手を持ち上げて、その手の甲にかざしていた手を万智は、ふつ、という気合とともに押し付けた。

「あ……っ」

右手の甲に走つた、焼き火を押し当てられたような痛さに声も上げられない燐の髪を、大粒の涙を流しながら撫でる。

「ごめんね、こんなことしかできなくて。……この呪は、燐が困らないように、ま、守つて、つくれるからね。私には、こんなことしかできないけど、いつも、いつも燐のこと想つてるから……！」

「……あり、がと……」

なんだかよく分からぬがとりあえず礼をいって、万智はびっくりしたように大きな目を見開いた。眩暈と吐き気に襲われて周りすら分からづらい中で、万智の顔だけがはっきりと見えた。
「泣かないで……っ、ていうか、なんで……」

なんで、万智はお母さんやばあばと同じよになこと言つてゐるの？

最後まで言葉が続くことはなく、ゆっくりと燐の瞼は閉じていく。

心の中で本能のよつたなものが「閉じちゃいけない」と叫んでいても、自分の力では開けられない。

狭まる視界のなかで、万智が燐をぎゅっと抱きしめるのを感じた。万智の涙が制服に染みていく。

「泣かないで……」

燐は繰り返す。大切な親友に泣いてほしくないから。完全に閉じた瞼は、もう自力で開けることができない。それでも、と、燐は声にならない声で囁くようになってしまった。

「泣かないで……」

「燐……」

「燐……っ」

叫んだ万智は、力いっぱい抱きしめた。消えるな、行くなと叫ぶ心を表すように。

燐が完全に消えたとき、抱きしめていた手を自分の肩に回した。叫びそうになる口を噛みしめながら。

話 朝とい、弦量とい、別れい。 (後書き)

ひよつと（こや、かなづ?）短いですかひみへ出発ですかー。

一話 気付いたら。「大人」「大人」と「&幼女

「い、イタタ……」

今、燐は「トトト」と舗装されていない森の道を通るほり付き馬車の中に荷物のよひに転がされている。その理由は、ほんのちゅうと遡る。

約一時間ほど前……

「……はあ？」

田を覚ました燐は、視界に映る世界に思わずケンカを売るような声を上げた。無理もない。燐の前に広がっているのは見慣れた景色ではなく、「ここ日本じゃないじゃん！」と思わず突っ込んでしまうような草原が広がっていたからだ。

「え、これ夢じゃないよね？ 多分。……これはあれか、異世界とかこいつやつか？」

そこには思ついたとき、燐の思考は爆発した。

「……はあああああー!? 別にあたしじゃなくともよかつたじゃん！ もうつ見たいアーメとドリマと動画があつたのに！ あつ、曲も聞けないじやん！ マンガも小説も読めないじやんよおー！」

この際はつきりと、かつ簡単に明言すると、燐はオタクである。興味があればファンタジー・恋愛もの・新聞・醤油の瓶のラベルまで、幅広く読んでしまう。あの性格をした万智でさえ、燐のこの部分には苦笑いしかできなかつた。

まあそれは置いとして。

「……まあ、ここで現状を嘆いていても仕方ない。よし、とりあえず歩こう」

本当に嘆いていたのかは疑問が残るところだが、気分を入れ替えて歩いて行つた燐だった。

いつの間にか森のようになつていて、木々の間から入つてくる木漏れ日に照らされて明るい道を歩いていく燐は、清々しい空氣に深呼吸をした。

「あへ、きつもち」――

辺りを見回しながら歩いていく燐、湖が見えた気がした。

「おお、湖がある！」

湖を見つけた燐は、疲れた足を浸そつと思い、湖へ近寄つて行った。

「……だあれ？」

湖のほとりまで近づき靴などを脱ぐとしたところで、いきなり聞こえた女の子の声にびっくりした。

「えつ！？ あ、木崎燐です」

「ふうん？」

驚きながらも律儀に返事をした燐の前に、目の前の湖からふんわりとした服を纏つた女の子が浮かんできた。

「ぎやーっ、幽霊！？」

「むう、失礼な。リイ800歳くらいだけど、死んでないもん！」

「は、800歳？ こんな小っちゃいのに？」

「むうう！ もうー！ リイは神様なんだよー？ もうけょっとけ、けえい？ ……あつ、敬意を」

「あああ、ていうか超かわいい！ ビウしきつめつちやくちやかわいい！ こんな妹がいたらなあ」

「え？ そ、そう？ そつならいいんだよ。別にかわいいって言われて嬉しい」ワケじやないけどさ

「まさかのツンデレ！？」

「え、ツンデレって何？ 今のはちよつとふざけただけだよ？」

え、なんだ……。とか言いながら落ち込んでる燐を見て、自分のことをリイと呼んでいる女の子は、ふふっ、と小さく笑った。

1話 気づいたら。「だらけ」&幼女(後書き)

中途半端に切れちゃいますね(笑)

2話 新たな出会いと、契約と。

「それで、どうしてこんなところにいるの？」

「よくぞ聞いてくれた！ それは聞くも涙、語るも涙……」

「ちょっとふざけた口上をリイが一蹴する。

「おおげさに言つてないで、はやすく説明！！」

「うつ。まあ渋るほどのことでもないからいいけどさ」

そして燐は話し始めた。自分はこんなところを知らないところと、いつも通りに学校へ行こうとしたらいきなり眩暈と吐き気が襲ってきて気を失つてしまつたこと。

「……へえ、燐は『異世界』からきたんだね！」

「うーん、そういうことになるんだよね、きっと。いや多分？ あつ、ていうかさ、リイは帰る方法知らない？ 私、早く帰りたいんだけど」

「ん~、リイは知らないよ？ それに、次元転移魔法はもつと長く生きてる精霊か、強力な力を持つてる人じやないと行使できないの」

「ふーん……800年生きてるリイでも使えないんだ。ねえ、力つて？」

「力つていうのはいろいろあるんだよ？ 神力、聖力、魔力、……それに光や闇のエネルギーも」

「へえ、いろいろあるんだ。ていうか三つとか五つとかぐら~いじゃん」

「力やエネルギーは、今こうしている瞬間にも新しく生み出されているんだよ。思いの力、想う力、怒りのエネルギー、衝動的に生まれた感情の力……。いろいろな力が生み出されでは、消えていくの」

「なんで消えるの？」

「単に力不足だったってことのほうが多いけど、世界のバランスを崩してしまつほどものだつたりすると『大いなる意思』の力が働く

いて強制的に消されちゃうの。そういう大きな力がバランスを崩した後じや遅いから」

「へえー……。ねえ、『大いなる意思』って何?」

そつかー知らないのかーと一人額きつつリイはまた口を開いた。「世界はいくつもいくつもこの世に存在しているの、暗くておつきくて、なつがーいカーーテンの上にガラス玉が何個も転がってるみたいに。そのさまざま世界は、過去も、今も、そしてこれから先も存在し続けるんだけど、ジャマしてくる強大な力があるの。それがさつき言つた神力や魔力、エネルギーや強い感情……そういう力。力は使う人によって毒にも薬にもなるつてこと!『大いなる意思』は、自分たち世界が存在し続けるために邪魔者を倒す力、世界の力つていうことなんだよ」

「へえーなるほど、と納得しているといきなりリイが声をかけてきた。

「ね、燐!なんかね、燐からいい匂いがするの!!」

「え、いい匂い?香水とかはつけてないんだけど?」

元の世界にいたときは、周りの女子が恋だ化粧だと騒いでる間、燐は万智が持つてきたチョコレートを歓喜の声を上げながら食べていたのだ。

「ふうん?……よし、ねえ燐!契約しようよ」

「は? 契約?」

「燐みたいにいい匂いがする人とは、契約したい! 痛くないから。ねえ、お願ひ!…」

「え、まあ痛くないんだつたら……」

「ありがとう、燐!」

嬉しさのあまり、リイは燐に抱き着いた。（わーかわいいっ!）なんて思いながら抱き返していると、

「えつとね、契約の徵しおはどんなのがいい?」
「え? 徵しお?……んー、それ、キレイ?」

「すごくキレイにもできるし、小っちゃくもできるよ」

首飾りつぽく…… チヨーカーにしようかな。

「ふーん？ ジャ、チヨーカーみたいに首の回りをぐるっと」

「おつけー！ あのね、契約するときはリラックスして、心の中に浮かんできた言葉をそのまま声にだしてね」

「ん？ うん、わかつた」

「じゃあ、いくよ？」

そういうとリイは、腕を横に薙いだ。一人を囲うように水の壁が円形に立ち上がる。

「な、何これ！？」

「ジャマされちゃつたら大変なことになっちゃうから。結界みたいなものだよ！」

「ふ、ふうん……」

大変なことになる、とはどういう意味なのか聞きたかったが嫌な予感があるので聞かないことに決め、改めてリイと向かい合つた。

「異界から来る、来訪者よ。我、大精靈が一人、水を司る”リイラナイ・フォーノ・アルブレイジャッダ”と契約を交わすことを望むか。心の言葉を申せ」

話を自分に振られた燐は、心に浮かび上がった言葉をそのまま口にした。

「私、木崎燐は、大精靈が一人”リイラナイ・フォーノ・アルブレイジャッダ”と契約することを望みます」

「汝、嘘偽りなく誓えるか」

「誓います。でも友達のほうが多いかな。誓うって主従関係みたいだし。つてあつ」

なんとなく口に出した言葉に、やらかしちゃつたかも、なんて思いいながら恐る恐るリイの方を見ると、ビックリしたように目を見開いて固まっていた。かと思つたらいきなり笑い出した。

「……ふ、あはははははー！ ひ、ひはははふぐつ……つ、つづー！」

「ふ、くほつ」

「え、なにー？ どうしたのー？」

まさかリイの頭がイかれてしまったのかと思つほど、必死に笑いをこらえている。

「えーと……？」

「「」、「ぬ……！」 ホホン。……よろしご。では、汝と契約を交わそう」

すつ、とリイが腕を伸ばすと指先から水が一本の紐のよつに出てきて、燐の首に三重に巻きついた。きつくなぐ、重さもあまり感じない。

「わあー、ありがとう！」

「ふふっ、どういたしました！」

「……て、いうかさ。大精靈つてリイ、その、水の精靈のなかで一番偉いってこと？」

「んん？ そうだよ」

「うわー、また面倒くさいなこと」……

「なんか言つた？」

「え、いや、別に？ それよつさ、今さらなんだけど。なんで言葉が通じるの？ 異世界なんだから通じないんじや？」

「この世界の言語が燐のいたとこのと似ているつていうのもあるんだと思うけど、燐の右手の甲に呪が刻まれてるから、そのおかげだと思つよ？ まあこの呪は他にも何かありそつだけど」

「へえ……」

万智に感謝を心の中でいつ。

ありがとう……。

そんな燐を微笑みながら見つめていたリイは、なにか感じたのかいきなり鋭い誰何の声を放つた。

「誰？」

最初に燐にかけた声色とは違い、あきらかにリイは相手を敵視している。

叢をかき分けて出てきたのは、長身の陽気そうな男だった。口一
づを口深にかけ、顔が分からぬ者がその後ろに立っているが、こ

ちらも背が高いので男と燐は判断する。

「うわ、おつどりいた。フォーノが契約したってのは、やのじのちま
いのか?」

「……うるさい。黙れ」

「ひつど!」

二人の男のテンションの違いに、なんなんだこいつらは……、と思
いつつも、燐はついその騒がしさに凝視してしまつ。

「そなたら、何故ここにある。何の用で来た」

なぜか古めかしい口調になつてゐるが、イライラしたようにリイ
が問うと、燐としては「ちょっと怖いんですけどー?」と、軽くパ
ニックになり、見ていることしかできない。

「何の用かなんて言わなくてもわかるだろ。やのじの迷子を拾いに來
たんだよ」

「え、迷子? 拾いに來たつて、私?」

「そーゼー。そこのかみー!」

「こいやかに笑いかけてくる男に若干氣を許しかけたとき、リイの
言葉が割り込んだ。

「ならリイも行くー!」

「なんだその喋り方。湖の管理はどうすんだよ」

「他にやりたい人いるし」

「え、そんな簡単なんだ……」

一人はコントでもしてこよつにペラペラとしゃべり続け、その
結果、リイは説得することができたようだつた。

「じゃ、こいつか

「えええつ! ちょっとリイ、なんか怪しくない?」

「怪しいけど大丈夫だよ」

「えー……」

しかし、「こいつどうだつだやつていても元の世界へ帰れるとは限
らない」とポジティブに考えると、一緒について行つた方がいいん
じゃないかと思ってきた燐は、燐の返事を待つてゐる3人にむかつ

て深々とお辞儀をした。

「……よろしくお願ひします」

「っしゃー！ 任せとけ」

「何を」

「そりゃいろいろとだよ」

フードで顔がよく見えないが、意外に低い声の男に聞かれ、元気いっぱいにもう一人の男は説明を始めた。そんな2人を尻目にリィは燐に抱き着いた。

「りーんつ！ これからよろしくね！…」

「もちろん。こちらこそ、よろしくね」

何も知らないこの世界で、何年も前からの友達のよう接していくれるリィに嬉しさがあこみあげてきて、思わず力いっぱい抱きしめ返してしまった。

「あーー、ずりい！ 僕もやりたい！」

「バカじゃないのか、お前。お前がやつたらただの変態だ。いや、もう変態か。邪魔して悪かつたな、変態」

「バカじやねえよー！ あと変態変態つて呼ぶなつ」

落ち着いた男にどなつている男はまるつきりイジられていくようにしか見えなかつたが、言動のそこかしこから仲がいいのが伝わつてくる。

リィともこんな風に仲良くなれたらいいな、なんて思いながらりいと笑いあつた。

2話 新たな出会いと、契約と。（後書き）

今回はちょっと長く書いてみました。
一人の男、怪しく見えますか、ね……？

3話 「自己紹介ターイム！」

「せつてと。それでは、自己紹介ターイム……」

その時、燐は悟った。この男はいつもこの変なハイテンション野郎……もとい、ハイテンションな人なのだと。

「えー、と……。私からでもいいですか？」

「おお、いいよ~」

「私は木崎燐です。あー、歳は18です。他になにかこいつにあるかな……」

「あ、俺好きなものとキレイなもの聞きたい！」

「好きなものは、マンガとアニメとゲームとボイスと……」

「おお、見事に知らないものばっかり……」

変な合いの手を無視して進める。

「キレイなものは、キレイだと思ったものです」

「こきなりアバウトに……？…………あ、ねえ。せつまの好きなものを思ひ浮かべてくれる？」

「え？　はい……」

燐の額に手で触れてきた男に唐突に言われながらも思ひ浮かべる。私の好きなものは……。

「へえ、こんなものなんだ。ほおー…………なんだとコレ。男が、野郎どもがぐふえつ！　づ、うえつぶ…………」

いきなり手を離した男は、気持ち悪そうに言つた。

「あ、ごめん。昔友達に無理やり読ませれてたやつを思い出しちゃつた。大丈夫？」

「燐ちゃんの世界では、いろんなものが当たり前にあるの……？」涙目の中が訊く。

「あ、リイ知ってるよ。『うつこつ』の『腐』っていうんだよね！」

「うつー！　でも、よく知ってるね？　これ私の世界のものなんだけど」

「リイ神様だもんっ」

「ああそつか」

「いや、納得すんな。……ああでも、俺もこんなのが見たことがあるぞ。たしかお前の妹と姉が持つてなかつたか?」

「ああ。あの二人はもう末期だ」

ローブを曰深にかぶつた男が返事をする。どうやら姉妹がいるらしいが、どちらも同じ趣味らしい。

「いや、こいつも末期の症状が出てきているんだが……」

「失礼な。わたしは読まれただけです!! けつこうおもしろかつたけど…」

「そうだよ、そんなふうにこいつのつて差別なんだよ」

「はいはい……、それじゃ、こいつらの自己紹介もしようか」

燐たちの雰囲気に圧倒され、逃げるより話題を転換するとしゃべりだした。

「えー口ホン。俺はリアン・イロネージヤ。歳は25。若いだろ。好きなものは酒と女と……」

「ハイ次」

「燐ちゃん冷たいつ! ……はいはい、もうつ。キレイなものは辛い物だな。あとこいつとは親戚。ほれ、お前の番だぞ。あとフードとれ」

リアンはぱわつと男のフードをぱぎ取つた。

「……カイル・イロネラ。歳は22。好きなものは甘っこものとかおいしいものと昼寝。あと楽しいこと。嫌いなものは楽しくなことと思つた事とかいろいろ」

無愛想さにイラツときた燐は思わず口に出してしまつた。

「すつごっこ無愛想……」

ぱっ、とすごっこ勢いで振り返つたリアンにびくつてしまこ、思わずひいてしまつた燐を見ていう。

「お前、すげーな。この顔見てそんないと口に出せるの。ですがこ俺でも最初はビビッたぞ」

「え？」

実は燐は、「リイかわいいなあ」なんて思いながらリイを見つめていたのでカイルという男の顔をまともに見ていなかつたのだ。だがリアンの言葉に興味をひかれ、ゆっくりと視線をカイルに向けていくと……。

「……あ

そこには、端正に整つた……いわゆるイケメンの部類に入る顔があり、その右頬には刀傷があつた。しかし、無表情なその顔はどんな攻撃よりも怯むものであり、その口から拒絶の言葉を吐き出されればどんなことになるか……そんなことまで想像させる。

「あー……、その、見てなかつたつていうか

「ブフツ。聞いたかカイル！ 今見てなかつたつて言つてたぞ！ どんなに拒絕しても恋する女の子が後を絶たないあのカイルにぐべツ」

「余計な情報を垂れ流すな。だが、ふむ。お前みたいにあつさりしてやつは好きだ。これから友人として仲良くやつていきたい。よろしく」

「あ、こちらこそ。ていうかすいません、あんなこと言つちやつて」
あたし正直者でして……。と心の中で呟く。するとリアンが爆笑し、カインは「くつ」とふきだした。燐は何が何だか、といつた表情で「一人の表情を窺う。

「え、なに。まさか心の声がどうのとかいわないよね」

「ふふふぐつ、はあ。正解！！ 僕ちょっととした魔法なら使えるからちょっと心の声を聞いてみてた。まあそのせいでさつきみたいなことにもなつちゃつたりもするんだけどね」

「それはお前が未熟だからだ」

「うつせえよ。お前だつて聞いてたくせに！」

「俺はこいつが信用できるやつかどうかを確かめよつと思つて……」「じゃかあしい！ まったく、」ちぢや「ちぢやと。それとな、こいつが無愛想なのは人見知りするからだ」

は……？ という文字が一同の空氣に降りてきた。こんなにかい男が、人見知り？

誰がふ、と噴き出したのか、爆笑の嵐が吹き荒れた。ところを限界になつたカイルが恥ずかしげに怒鳴つて收まる。

「いちではじやかあしいなんて言葉までつかわれているのか……？」と疑問に思いつつも、とりあえず場の空氣を換えるために質問してみる。

「あれや、この世界つてどうこいつ世界なの？ あたしの世界は、えつと、太陽系第三惑星……だけ？」

「ああ、詳しいことは知らないけど地球とか日本とかは知ってるよ」「え、なんで？」

「それは歩きながら話す。おい、リアン。もう行かなきゃいけないんじやないか」

「おお、そうだな」

「え、何処行くの？」

「リイ、隊商のテントだと思つ！」

「ああ、フォーノは知つてゐるんだつたか」
知つてるよー、と答える声にまたかわいい……と抱きしめる燐を
リアンとカインはせかす。

「……うーし。じゃ、しゅつぱーつ……」

3話 「自己紹介ターイム！」（後書き）

名前がよつやくせました～！

そして冒頭に戻り……。

「あのさ、なんでこんな舗装されてない道を縄で縛られて体中痛い思いをしなきやいけないわけ?」

「えー。だつてさあ、これから通る『国境の門』は取り調べが厳しいんだよ? 身分証明書なんて燐は持つてないし、ましてやこの世界の人間でもない。そんなのバレちゃつたら……ねえ?」

「え、なに。ちょっと、そこで止めないでよー!」

「ええー、言っちゃつていいの?」

「う……! や、やっぱいい。なんかイヤな予感がする」

「遠慮しないでいいんだよー。実はね、……」

「い、嫌あああああああ……しゃ、喋るな変態っ」

「変態だなんて、ひどいっ!」

「つむせえ、バカ」

燐とリアンのゴントのようなやり取りに耐え切れなくなつたカイルが、リアンに向けてゲンガツをかます。

「いつてえ! カイル、なにすんだよつ」

「お前がつむせえから悪いんだ。ちつとは黙つてろ」

「そつだよー。それに他にも話さなきやいけないことあるでしょ?」
「話したい」と、と首をかしげる燐に今度はリアンに代わつてリイが話しが出す。

「あのね、IJの世界にはね? 燐の世界の人もほんの少しだけどいるんだよ?」

「え? どうこいつ」と?»

「うーん……。えつとね、燐の世界でね、辛いことがあって、それに耐え切れなくついて……。そんな人が、ここに飛ばされてきて少しずつ自分の心と体を癒して帰つていいくの。でも、全員がここに来れるってわけじゃないから、向こうの世界では自分で命を絶つてしま

う人とかがいるんだけど……」

「なんで全員が来れるわけじゃないの？ それに、その、自殺しちゃう人がいるってなんて知ってるの？」

「全員が来れない理由は知らないんだ。あと、自殺しちゃう人がいるっていうのは感情、かな？」

「感情？」

「そう。リイね、神様だから。たまに強すぎる感情とか伝わってきちゃうの」

ほー、と考えている燐を微笑ましくリイは見つめる。リイは見た目はかわいくても、中身は約800歳である。精霊のなかでは若くても燐の方が年下で、そんな燐がまじめに考えているのはとてもかわいく思える。

「うーん、感情と自殺がどうつながるの？」

「よくぞ訊いてくれました！」

まるでそう訊いてくるのを待っていたかのように、リイは嬉しそうに笑った。

「感情ってね、自分の『今』を、『未来』を左右するものなんだよ？ 過去だって、感情があつて、それに合わせていろんな道を選んで歩いてきて、それが積み重なつて今になるんだから。起こった出来事をその人がどんな風に感じるかは人それだけ、悲しみと喜びだつたら、誰だつて喜びの方がいいでしょ。だから悲しみに耐え切れなくなつたとき、人は大きく分かれるの」

小難しいな、と感じた燐は簡単に説明してくれるよう頼む。「ふふ。にがーいお薬飲むよりも、あまいお菓子を食べたいよね、つてことだよ」

「ふー……ん？」

リイに子ども扱いされたような気がしたが、とりあえずその説明で納得することにした燐だった。

穏やかな風景が続き、空では鳥たちが旅をする。のどかなそのひと時は、燐の心をすこし落ち着かせることができた。

しかし現代の子の燐は何もすることがなく、暇で暇で仕方ないの馬の手綱を握るリアンたちに声をかけた。

「ねえー。まだー？ もう暇で暇で仕方ないんだけじ」

「んー。もうちょっと時間がかかるんだけど……。あ、そりだ！ 燐が好きなものでさ、こいつのあつたよね」

いきなり幌馬車をひかせている馬の手綱をカイルに任せると、リアンは幌が被さった荷台に転がされてる燐の耳元に口を寄せ、低い声で囁いた。

「ね、こいつことでしょ。……燐、だーいすき」

「ぬあつー？ ちよ、み、耳が。耳があああーー！ くすぐった、ちよつとマジでこわばゆいんですけどーー！」

必死に耳を手でこすりつとして、ゴロゴロと荷台を転がりまわる燐を見てリアンは大笑いした。

「あつははははははっ。カイル、リイ、見ろよー。めちゃくちゃかわいい反応すんだけどー！」

「リイと呼ぶなっ

「呼びやすいじゃん

「む。まあ、仕方ないか……」

「ね。なんかリイってあたしと喋るときたなんか口調違くない？」

「えー、おんなじだよ？」

えーそつかな……、と疑問に思つ燐をおいて話は続いていく。

いつの間にか林道のようなところを抜け、燐がゴロゴロと転げまわっていた間に道は通りやすい平らな道になつていて。舗装されはおらず、よく人やこいつの馬車などがよく通るのか踏み固められている。

「……あれ、もしかしてその『国境の門』とやらの近くまできていい

たりとかする？」

「ああ。この調子でいけばあと15～20分程度だろ?」「うう」

どうやら、おしゃべり好きなリアンはリイと話を続けていたら笑い話に発展してしまつたらしく、二人そろつて笑い転げている。なので代わりにカイルが説明をしたらしい。

「カイルってさ、あんまり喋らないし笑わないけど、なんで?」「喋るときは喋っている。笑わないのはおもしろいことがあまりないからだ」

「あー、わかる。なんかさ、無理に愛想笑いしてると顔の筋肉引きつってこない? あの感覚が嫌でさ」

「それは分かる。……一つ聞きたいんだが、いいか」

「ん? ああ、どうぞ?」

「最初から顔を見てなかつたにしろ、雰囲気で話しかけようとは思わないといわれたことがあるんだが」

「それ言つたのは俺!」

「黙つてろ」

「はい……」

「コホン。……で、だ。なぜ話しかけた」

「んー。私がいた世界にもね、そういうのいたんだよ。私の男友達で、ちょいといいガタイしてるやつが」

「ガタイ?」

「ああ、体のこと。でもね、体は大きくても雰囲気とか顔がなんかこう……『優しい熊さん』みたいなヤツなの。そいつもね、カイルみたいに最初は怖がられてたんだけど、少しづつ相手のことつて分かつてくじやない? 一緒にいれば。

で、そいつは今は結構人氣者になつてるんだ。頼りにされちゃつたりなんかして、さ。だからね、感覚的に分かつてるのよ。そういう人たちほど情が厚いし、悪い人ばつかじやないって

そう話し終えるとカイルはふん……、と鼻をならすようにして照れたようにそっぽを向いてしまつた。それを目ざとく視界の端に見

つけたリアンはからかう。

「おお！ 久しぶりに見たぞ、お前が照れてるところつーー。」

「うつせえつつってんだろ！」

キレたカイルはゲンコツを力いっぱいリアンの頭へと振り下ろす。

「い……つてえ……」

「あ、ねね！ あそこ見てつ、あれがそうじやないかな？」

「おお、やつと見えたか！ 僕もう疲れたぜ……」

リアンがはあ……、とわざとらしくため息をついて大きく背伸びをしてみせる。

「お前はほとんど一人で騒いでいただけだろ？」

「そうだよ」

「うつせえ！」

三人でにぎやかに喋っているのをしり目に、燐は見えてきた『国境の門』を静かに見つめる。

あれが、『国境の門』……

近づいてくる門は大きくて、まるで燐をこの世界からはじき出すうとしているかのようだった。

5話 「国境の門」

少し経つと見えてきた、国境の門を通るために並ぶ人の列に燐たちも並ぶ。

そろそろ門番に話を聞かれるころか、といつとき「rianが鼻歌を歌いながら「ちょっとごめんね」と燐に囁いた。

「何が……つ、がはつ」

荷台に転がされた燐の腹に、rianがいきなり蹴りを入れた。

「おい、お前。反抗的な目Eしてんじゃねえぞオラ」

ゲホゲホと体を丸めて咳き込む燐の体を、まるでいうことを聞かない動物を見るような目で見てまた腹に蹴りを入れる。

「おい、何事だ！」

いつの間にか順番が回ってきたのか、門番たちは馬車の隣にいた。説明を求める門番たちに、いつの間にかロープを田深にかぶつたカイルが事情を話す。

「いやね、たいしたことじや あないんでさあ。ただこの娘っこがちいつとばかり暴れやがったもんでね。門を通つたあとに騒ぎを起こされちゃあ……ねえ？」門番の旦那

「む……。そうか。しかし仕置きは静かにやつてくれ。罪人だか召使いだかしらんが、今はあまり騒ぎを起こすな」

「いやあ、あつしたちもそういうつもりでやつたんじゃないですよ……。ところで、旦那。この町に勇者の一行が来てこるってえのは本当ですかい？」

「ああ、本当だ。……と、そろそろ混んできた。早く通れ」

「ありがとう」「ゼえやした」

パックパックと馬車が進み、多くの人が歩く大通りを抜け、しばらく行つたところの角を曲がり、喧騒が遠くなり微かに聞こえてくる裏道に入ったところのさらに奥の角を曲がつたところでようやく話し出した。

「よし。もう話していいぞー。あとでつま蹴つちやつて」めんな
「いったい……。マジで痛いんですけどこんにゃりつ……！」

「だからホント」「めんつてー」

「リアンつたらあそこまでしなくつてもよかつたんじゃないの？」

「うつせ。今日の奴らは比較的簡単に通してもうれたけど、門番長
がいたらやばかったんだかんな！」

「うー。まあ、しかたない、のかな？」

「そうそう、仕方ないんだつて！」

「お前が言うなつ」

燐とリイが口をそろえて言つて、リアンは「ホント」「めん……」
とうなだれた。

「何も本当にやらなくとも……。はあ。お前つて本当にバカだよな
「うつせえよ……」

皆に言われてすねたリアンは、とりあえず燐を縛つっていた縄をほど
いた。

「ていうかさ。カイルすつ」「詭つてたけどなんで？

「……変装？」

あ、そうですか。

「んでさあ、今度はどこに向かってるわけ？」

「旅宿」という旅人や行商人たちなどが泊まる宿だ。今はそこに隊商
の仲間たちがいるらしい

「テントじやなかつたの？」

「今、この国に勇者の一行が訪れているんだよ。こんだけにぎやか
だつたら品物も売れるだろうつづることで移動してきたんだと」

燐とカイルの会話にリアンが加わり、会話が進んでいく。

「ふーん。あれ、そういうえばリイは？」

「精霊界にでも戻つてるんじゃないかなー」

「久しぶりにあの泉から離れたから疲れたんだわ。少し経てば出
てくる」

「ふーん、そなんだ。リイ早く慣れるといいね」

「ああ」

リイを思いやる燐の顔は、精靈やら何やらそんなものは関係なくただ友達を案じていいそれで、カイルはいいやつなんだな、と思つた。

しかし、すごいな。異世界に来たつてだけでも混乱するだろうに、精靈を友達のように扱い、あげくには心配までしている……。こいつ、頭の中どうなつてんだろ？

そんなことを考えてみると、リアンが考えを『読んで』いたのか、「ふくすう」と我慢しようとして失敗したような笑い声を出した。

「お前……」

「しーっ、大声出すなよ。燐が起きちまうだろ」

初めてのことだらけで疲れていたのか、いつの間にか燐は横になつて眠つていた。

「…………いつの間に寝ていたんだ？」

「お前がボケーっとしてる時に、だよ。馬車の揺れが心地よかつたんだろうな。……んなこと言つてたら俺も眠くなつてきたんで、あとよろしく……グー……スピー……」

「ちよつ……。はあ、寝んの早すぎんだる」

とりあえず手の届くところに置いておいた布を二人にかけてやり、カイルは前はと向き直つた。

「ふあああ。…………さすがに俺も眠いんだが」

仕方ないな、とため息をついて、カイルは目的の場所『旅宿』へと馬車を走らせた。

6話 旅宿と、淋しちゃ。

「……い、おい。起きる一人とも。着いたぞ」「んー？…………ああ、着いたんだ」
「ああ。つーかこのバカ起きないんだがどうしようか」「えー、放つとけば」「うん、ごめん。今起きた」

最初から起きるよ……。と朝から突っ込む氣にもなれずにいると、いきなりカイルを後ろから杖が襲つた。

「いつってえ！ なんだよ！」

「つぬさいわい。客が入つてくる夕暮れ時に店先で大騒ぎするな！」

「この宿に迷惑がかかるじゃろつが」「仕方ないだろ。だいたい、大騒ぎしてたのはリアンのアホだ。俺じゃない」

「そういうの責任転嫁つていうんだぞ！ おばば、俺も騒いでなんてないからな！！」

「知つとるわい。今のははたきたかつたからやつたんじや」「余計に酷くね！？」

そんな風にギヤーギヤー言い合つてこむ三人のなかに燐が入つていけるわけもなく、「どうしようかなー」とのんきに考えながら馬を見つめていた。

「……で、そここの娘がこっちに来た子かい？」

「ああ」

「木崎燐です。はじめまして」「わしの名前は…………いや、教えるのはもう少しくじけたよ。まあわたしのことは『おばば』とでも呼んでくれれ」「はあ……」

変な人だな、と考えてこむうちに三人の話し合には終わつたらしく、「中に入るぞー」とリアンが声をかけてきた。

「……うわあ」

中にはいった途端、燐はビックリしたように声を上げた。

「ここゲームの世界みたいだわ……」

そう、この”旅宿”という宿は、内装がRPGのよつで、ゲーム好きが来れば間違いなくテンションが上がりそうなといひだつた。

「皆は？」

セフリアンが聞き、おばばがめんどくわそつに答へる。

「見世物をやつている」セフリヤ。お前、そんなことも忘れたのかこのドアホ

「だから一言多いんだって！」

「お前はいつもうるさいの。まあそれは置いといて、今日はもう夕食を食べて寝てしまえ。明日は早いからの。……おお、セフリヤ。決めたぞ。せつかく一人が戻ってきたのだから舞でも披露しろ。燐、といつたか？」

「あ、はい」

「おぬし、歌は好きか？ 音痴ではなかろう？」

「歌は好きです、音痴でもありませんけど……それがなにか？」
「明日はおぬしの歌に合わせてこの一人が舞うからの。歌のイメージを直前までに教えておくとよこ」

「はあっ！？」

思わず大声を出してしまつた燐におばばはいつ。

「なに、イメージを伝えるのはこいつら得意じゃ。心配はいらぬ」「いやいや、そういう意味じやなくて！」

「じゃ、食堂に夕食を用意させてあるからそれを食べて今日は早く寝ろ。よいな？ では解散！」

「ちょ、ええー」

予想外の出来事に言葉が出ない燐がカイルとリアンの二人に視線

を移すと、仕方ないなどでもこうよつて苦笑していた。

「……ああいう人なんだ」

「なんていふか、その、……ジコチュー？」

「まあな！ さつ、飯食おうぜー。俺もう疲れたし腹減つたしでもうだめだー」

「お前寝てただろうが」

会話をしながら食堂に用意されていたパンとシチュー、サラダを食べ終え、一人に部屋まで案内された。

「こりがお前の部屋なー。お前の部屋はさんで俺らだから。右が俺で、左がカイル」

説明と案内を終えたリアンとカイルがそれぞれの部屋へと引き上げ、部屋の中には燐だけが残された。

「わたし、なんでこんなとこに来たんだろ」

ぱつり、と小さくつぶやいた燐は、窓際に置かれた椅子に座つて窓を開けた。

燐の住むあちらの世界ほどではないにしろ、活氣があふれた町にはまだ街灯や店の灯りが灯つていて、その光が部屋の中にうっすらと差し込んできて、さまざまな色が踊る薄暗い室内は海の中を思わせた。

「きれい……」

景色をボーッと見ていると、この世界にきた当初は感じなかつた寂しさや不安感が押し寄せてきた。どうしようもなく寂しくなつて自分を抱き込むように両肩をつかんだ。

「ふ……つ、うう……！」

思わず涙がこぼれてしまふが、どうしよう、と悩んでいるのは燐の性分ではない。残る不安感などを押し込み、深呼吸して口を開いた。

「 緑の風が吹くときこ、私の声を思い出して
橙の灯りが灯るとき、私の温度を思い出して
あの日見た君の涙を、嘘にはしたくないから

君に笑顔を届けにいくよ その涙が溶けて消えるまで

歌い終わった後、少しだけ落ち着けたように感じて安心する。

(これが現実だというのなら……私は、ここで生きていいかな
ければいけない。ここでがんばれば、元の世界に戻れるかもしれない。)

知らない世界に放り出されて、信じていいのか分からぬ人たち
と話し込んだ上に腹を殴られ、もつと知らない場所に連れてこられ
……。

逃げることなんていつでもできた。

それでも逃げずにここまでついてきたのは、リアンとカイル以外
の人に会ったとしてもその人が『いい人』だったとは限らないから。
それだつたらいい人そうな二人について行つた方がマシだと思つて
ついてきた。

思った通り、いい人っぽかつたけど。

そう思いながら窓を閉め、カーテンも閉めてベッドへと向かう。

(私は……無事に帰れるのかな)

洗濯されたシーツの匂いが自分のベッドのものではない、そんな
当たり前のことには涙が一粒、頬を落ちて行つた。

(……ううん。無事に帰れるかじやない。何が何でも、絶対に、心
も体も無事に帰るんだ。)

涙を拭つて気合を入れる。

不安と闘いながらも、生きていく覚悟が今やつとできた。

7話 寝起きれど、手元と、宿の女将。

「…………？ 朝か。ふ、ああ、あ。眠いなあ。ていうか、……早すぎなんじや、この時間つて」

田を覚ました燐は、まだ朝早く薄暗い紺色に染まつた室内を見渡した。

（早く起きすぎたな。しかも朝早いし。眠このに一度寝したら、絶対起きれなくなるしなあ……）

とりあえず、通学途中にいきなりひに来てしまつたので着替えもなく、寝ていたベッドを整える。

燐ひとりには広すぎるといつてもいい室内にはドレッサーが置いてあり、そこに載つっていたブラシで肩より少し長い髪を梳かした。（わたし、こんな冷静にいつも通りといつてもいいことやってるけど。普通は異世界に来ちゃつたファンタジー系のだったらさあ、こう、『ええ！？』『うわよ、なんでこんなことにいるわけ！？』っていう風になるのが当然つていうやつでしょ。わたしつて肝が据わつてんのかな……）

とりとめもなくそんなことを考えていると、なんとなく出歩いてみようところになつた。昨日はおばばに『今日はもう寝ろ』と言われて言われたとおりに寝てしまい、この宿をじつくり見ることができるなかつたので改めて見て回りたくなつてきたのだ。

「…………ま、いいか。どうせ誰も起きてないだろうし」

グルグルとおんなじことをいつまでも考えていたつて、答えが出ないので疲れるだけ。そう思い、ドレッサーの鏡に顔を映す。髪の毛はちゃんとついているかどうか確かめて部屋を出た。

？ ? ?

「見事に誰もいない…………。当たり前か」

人気のない廊下を歩いていく。

足音を立てないようにしてそろり、そろつと歩いていくと、ある部屋からは大きなイビキが聞こえてきたり、またある部屋からはにやら小さな物音がしたり……燐の他にも起きているものが、そろそろ活動を始める時間らしい。

けつこう、起きてる人つているんだ……。

そんなことを思いながら一階へ降りると、厨房はすでにあわただしく動き始めていた。

いい匂いに連れられてフランフランと厨房に向かつ。

(お腹減ったなー。うー、なにか食べられるかな。お金持つてないんだけど)

「すいません、あのー……」

今から「はん食べられますか？」 そう言おうとして、思わず

口が止まつた。

「はい？ ああ、「はんなりむづづく」と待つてくれるかい？」

「あ、はい……」

見上げた先の女将さんらしき人に返事をする。

(……に、しても。)

デカくないか？

燐はビックリして声が出なかつた。

「あたしゃこここの女将のマルサフ。よろしくね！ で、どうしたんだい？ お腹減っちゃつたかい」

「ええつと、はい。そうです。わたしは、木崎燐です。よろしくお願いします」

「んー。さつきもいつたけど、もうちょっととかかるのね」

「あ、じゃあ、わたしあ手伝いしたいんですけど、ここですか？」

「手伝ってくれるのかい！ あつがとう、それじゃ、やつのイモの皮剥いといてくれる？」

「はー！」

マルサフに示されたところごくくと、大きな籠が一つと、その片

方にこれでもかといつまじ詰め込まれたイモがあつた。

「はい、椅子！ いや～、手伝わせちゃって悪いねえ」

「いえ、なんかちょっとやりたかったので」

さつそく包丁を持って皮をむき始める。

「『ボロ』の表面に四苦八苦しながら皮をむき、半分ほど減ったころ、手伝いにきたマルサフと一緒に剥きながらのおしゃべりになつた。

「……あ、こう剥くと確かに楽ですね」

「だらり~。……ところで、さあ。あんた、どこから来たんだい？」

「あー。えつと、異世界からです」

「こんなに軽く答えてしまつていいのだらうか、といつまじ軽く答えると、マルサフも納得したように頷いた。

「ああ、そうなんだ。……はあー？」

「ああ、やっぱうこう反応しますよね。」いつまじは「こんな」と当たり前にあるんですか？」

「どうなんだらう。前はそんなこともあつたらしいけど、最近はそんな話聞かないしねえ。そうか、あんた異界人だったのかい。なるほどねえ……あ、終わつたね。

そろそろ出来上がるころだらう。行こつか、燐

「はい」

皮を捨て、立ち上がりつてマルサフの後につっこいていき、イモの入った籠をゼエハアいいながら厨房の隅へと置く。

ふーっ、と一息つくと同時に、一つの足音がドタバタと階段を駆け下りてきた。

「そうだ。燐、ちょっとやめてこいやがんでおこで」

「え？ はい」

言われたとおりにしゃがむと同時に、すこし勢いでドアが開き、同時にリアンとカイルが焦った顔で駆け込んできた。

「マフ！ あの子知んない？ ほら、昨日俺らが連れてきた女の子

！ 髪の毛が肩より少し長くて、ちょっと変なカツコしてゐる子。

部屋にいないんだよ……」

「そうだねえ……あ！ 朝早くちゅうと外を見物してくるとかいつて行つちやつたよ」

「なんで留めておいてくんねえんだよ……」

「口が悪い！」

リアンの口の悪さがマルサフの気を損ねたのか、壁にかかっていたお玉でリアンとカイル、一人の頭を殴つた。

「いつてえ！ なにすんだよ……！」

「なんで俺まで……」

ブツブツと文句を言つ一人にマルサフは問答無用で言い渡す。

「あんたら一人とも、あともうちよつと食堂で待つてな。おもしろいもんがみれるよ……」

「はあ？ つたく……。で、その女の子は……」

「だから待つてなつて……！」

しぶしぶといった感じで食堂へ向かう一人の背中を眺めながら、マルサフは燐に声をかけた。

「もういいよ

よいしょ、と言ひながら立ち上がる燐を、今度はどこかへと引っ張られていく。

「な、なんですか！？」

「いいからいいから

「ちよつ……！ わたしは、お腹が、減つたんですね……！」

燐の叫びも虚しく、燐の体はマルサフに引きずられていったのだった。

「あの…… いろんなの着れませんっ！」

燐は店の奥に連れて行かれ、マルサフに着替えさせられていた。押し付けられた水色のワンピースは裾がロングスカートになつており、上からかけたエプロンは真っ白。この宿の作業着らしいが、見た目は鏡の国を訪れてしまつた金髪少女の服装のようである。もつとも、それよりもいくらかシンプルなものではあるが。

「なあに言つてんだい！ 着れないなんて、きちつと着られるじやないか。うん、あんた肌白いし、よく合つてるよ。髪の毛はどうじょうかねえ……。とりあえず上半分だけ結んどこつか」

そう言つて自分のエプロンのポケットから取り出した紐で燐の髪を結んだ。

「あ、ありがと」「どうぞいま」

「そしたら、これをあの一人のところまで持つて行つて」

「え！？ まさか、この服で……？」

恐る恐るといつたふうに聞くと、「もちろん！」と返ってきた。「ちょ、ありえないんですけど！ で、いや、のですね、マルサフさん？ 私もお腹減ってるんですよ。しかも私つてお客さんですかね？ ていうかなんで給仕しなきゃいけないんですかっ！？」

「そこは、ほら……ねえ？ あの一人ちょっと黙らせようと思つて……」

はあ！？とキレ始めた燐をぐいぐいと押して厨房にあつたパンやスープが載つたお盆を手渡した。

「じゃ、よろしくね」

「もう……。分かりました」

あきらめて両手にお盆をもつて一人の姿を探しながら歩いていく。と、すごい人ばかりが見えた。それだけなら別になんとも思わない。他にもそんな人ばかりはいっぱいあるのだから。

(なんかおかしい……。なんでこの周辺に座っている人たちは顔が青ざめているんだろう。しかもギュウギュウになつてゐるはずなのに、誰も離れないし、むしろ、もっとくっついてる……?)

イヤな予感がした燐は、厨房に戻ろうとしたとき、「ヒツ！」と、いう野太い悲鳴がおかしな人だから聞こえた。

またなにがあるのか……と思いつつそちらの方を覗いてみると、険しい顔をしたリアンとカイルの一人がいた。その顔を見て燐は悟つた。

この人だからと悲鳴の原因はこいつらか……！

ちらつと厨房のほうを振り返ると、マルサフがこっちに気づいた。(ちょ、マルサフさん！ なんか負の気配がするんですけど……！)と、田線でいうと、

(だから、ね？ 黙らせて！)

(いやいや、黙らせてってこういう意味だつたんですか！？)

しばらくの間、田線で会話していたが燐が耐えられなくなり、仕方なく人だかりの間を縫つて歩いていく。

「ちょーっとすいません。通してくださいよー。うわー！」

人の背中にぶつかつたり、誰かの足に引っかかつて「ケそそうになつたりしながらようやく一人の前までたどり着いた。

「何も頼んでないんですけど」

「あ、いや。マルサフさんがこれ持つてけつつてパンシられただけなんで」

「パンシられた……？ ていうか、え、燐ちゃん？」

やつとこつちを見た二人の顔は、驚き一色に染まつていた。信じられないものでも見るような顔つきに、燐の方もビックリする。

「なに、どうしたの？ あんなふうにへんなオーラまき散らして……。周りに迷惑だからやめてくんない？ あの邊のおじさんたち、窮屈で暑いだろうに、あんたたちにビビつてくっついてたんだから」「すまない」

と素直に謝るカイルを尻目に、リアンはさつそく質問していく。

「ねえ、何その恰好。なんでこんなことしてんの？」

話すまで延々と聞いてきそうなその様子に、ため息を一つつぶ。

「……あのさ、わたしお腹減つてんの。だから食べながらでいい？」

話すの

「ああ、いいよ~」

燐が持ってきたパンなどを三人で食べながら、燐はリリに至るまでの話を聞かせた。

? ? ?

「……と、いうわけだったのです。ちゃんちゃん」

と、水を飲みながらいうと、リアンとカイルが脱力したような表情になつた。

「なんだ……。心配して損した」

「まったくだ」

「ひつどい！ なにそれ！！」

と会話していたところに、マルサフが近づいてきた。

「衣装、楽しんでくれた？ 燐

白々しく聞いてくるマルサフにため息をつく。

「あのですね……」

「はい、お黙賞

「ありがとうござりますっ！」

「ええー、変わり身はやツ！ ちょ、ずるい。俺にも
「誰がお前なんかにやるかっ！」

マルサフとリアンが言い合にする横で、燐はマルサフがくれた袋の中をのぞく。
袋の中には、

「……お金？」

「ああ、少しはこいえ働いてもらつたしね。それにこつら黙らせ
る……ゴホン、あー、いや。まあとにかく、周りの爺どもも助かつ
たし。あたしも助かつたし。それに、あんな負の感情ダダ漏れみた

いなどこ行かせちゃつたしね

「ありがとう！」

「どういたしまして！　あ、燐はこの世界の通貨のこと分かるのか

い？」

「ぜんつぜん」

「じゃあこの一人に教えてもらいた。あたしはまだ仕事があるから無理だしね。いいだろ？」

マルサフが話を振ると、二人が頷いた。

「……じゃ、またね。あんたにゴルドヴィ神の加護がありますように」

そういうてマルサフは「ああ忙しい」と厨房へ入っていった。

「部屋で話しよう。それでいい？」

「あ、いいよ」

食べ終わつた皿をカイルが片付け、燐は貰つたお金を大切に袋に戻す。

一人分の荷物を持つトリアンが声をかける。

「じゅそつをまーつ。さて、じゃ、行くよー燐ちゃん

「うい」

「変な返事」

と笑いながら歩していくトリアンの後をついて行きながら考える。

「このお金、いくらいぐらいだろう。
何買えるのかな……。

8話 オ馳策（後書き）

燐はお金とおこしのとおもしろいものが大好きです w

9話 衣装替え

「で、マルサフからももらったお金のことだっけ？」

「うん」

燐はマルサフからもらった袋をベッドの上にひっくり返すと、出てきたコインを数え始めた。

「銅色のコインが……2、4、6、8、10枚。これでなにが買える？」

「そうだな。銅貨10枚ってことは、その辺の屋台とかで売ってるお菓子2、3個とかぐらいだな。この世界の母親が子供にその辺でなんか食つてるつづつてだすお小遣いぐらいか？」

「ふーん」

そこに一人分の足音が近づいてきた。一人はカイル、もう一人は

「そろそろ準備をはじめろっておばばが。まあついてきてるけど」

「……って、燐。おぬし、なぜそんな恰好をしておる」

マルサフに着替えさせられた給仕服のままだつた燐に目を見張り、早くこれに着替えろ、と出された服を受け取つても周りにリアンたちがいては着替えられない。それに気づいたおばばが一人を追い出しがかかる。

「これ、はよつ出来る！ 着替えられぬではないか！」

「ちょ、痛い！ 押すな、押しながら背中の皮つねんنつ……」

「……！」

「こんなもの、皮でなく肉じゃ！」

ギヤー・ギヤーと騒ぐリアンと、無言で顔が引きつるカイルを追い出すとかなり静かになつた室内で燐は着替え始めた。扉を閉めたおばばが戻ってきて、「ここに腕を通して……」など言いながら、なんとか着れた。

「なんか……サリーツボい？」

燐が着てるのは濃い緑色のサリーによく似たもの。それに同じ色の長く薄い布を頭にゆったりと巻いて、顔が見えないようになっている。

手首とはだしの呪首にはシンプルで、存在感がある金色のブレスレットとアンクレットが輝いていて、燐が歩くたびにシャラシャラと涼しげに音が鳴る。

「この服着てその辺のワンピースすつたら青い大きなおじさんが出てきて大きな声で『こんなにちはなー』とか……ないか。あつたら逆に変だよね」

「何をブシブシ言つておる。下に降りるぞい、あやつりも用意ができていろははずじやからな」

？　？　？

降りた先には着替えたリアンとカイルが待っていた。

「おお～かわいいじゃん！　ねね、俺らはどう？　かつこいい？」

「うん、ありがとう。わーかつこいい」

「そんな棒読みひどい！」

うわーん燐ちゃんがイジメてくんだけビーツー！とカイルに張り付きに行つたリアンは置いといて、おばばに話を聞く。

「もう曲は知つたか？」

「え、全然。昨日は部屋に入つてすぐベッドで寝ちゃつたから……」

「はあ……。カイル！　リアンはその辺に置いといてこっちへ来い」カイルは縋りつくリアンを蹴り飛ばすと、おばばたちの方へと歩いてきた。

「なんだ？　あ、そういうふうに曲伝えるの忘れてた」

「今からでいいから伝えておけ。わしはほかに用事があるでな」杖をつきながら歩いて行つたおばばを見送つて、カイルが口を開いた。

「ちょっとおでこ貸して」

「『おでこ』とかかわい……いえ、なんでもないです」

頭にかぶっていた薄い布と髪の毛を持ち上げると、そこにカイルが触れた。

「リラックスしてろよ……」

ほのかに額が暖かくなると同時に、音楽が聞こえ始めた。耳に聞こえるのではなく、直接頭に響くようだ。

「なに……？ なんか聞こえる」

「それが、今からおまえが歌う唄だ」

「おまえじゃない」

「……分かった。ほら、これで終わりだ。もつ覚えていろはずだ。直接覚えるようにしたから、忘れないだろ？」

「魔法つて便利だね」

「出番じやぞ。外に来い」

おばばが呼ぶ。

「ほり、リアン。行くよ

「もう……おまえら酷い……」

「はいはー」

9話 衣装替え（後書き）

ぶつ切りですね
カイル、リアンを蹴り飛ばすとか何気にどう（笑）

10話 韶く歌、美しき舞

「やつき俺たちが教えたの、覚えてるよね？」
「じゃ、……行くよ？」

「あー行きたくない」

「そう言つたな。おばばも樂しみにしてるぞ、客が集まつての方に行
つちまつたし」

ため息をつきながらも歩き出す燐を追いかけるようにリアンとカイルはついて行つた。

旅宿の外壁にもたれるように座る。せよほど観客が目の前にくる位置だが、燐は薄い布を幾重にも頭に巻きつけているので観客からは顔の輪郭がうつすら見えるくらいでしかない。

リアンがせは焼の前は立ったが、一方は歴は描いた刺青もときを隠すように、それぞれ反対の方に顔をそむけながら手を隠すように持ち上げた。

す

リアンとカイルが、最初の頃に燐のイメージを読み取ったのと同じようにして燐に教えた歌は、これといった歌詞はなく、音程もそれほど難しくないものだつた。

(あれ、なんか声がよく出
!? って、言い過ぎか)

今までになく声が出て、燐は気持ちよく歌つていた。その歌に合わせてリアンとカイルが、阿吽の呼吸で舞う。

だが、集まつた観衆は綺麗な歌声と美しい舞にくぎ付けになつた。

「キヤアアア
つかの間の寺も、
！」

つかの間の時も、悲鳴によつて壊された。

「なんだ！？」

「魔物がこの付近に入ってきたらまつたらしい！」 急いで逃げなけり

や俺らまで巻き添えになっちゃまつ……！」

「おい、逃げるーっ。あ、おいつ、年寄りとか助けろよーー！」

たくさんの中の声が飛び交う中で、燐は突然の騒ぎに戸惑っていた。

「ねえ、魔物が来て慌てるってことは危険なんだよね？ 逃げた方がいいんじゃないの？」

そう聞く燐に、リアンはフツと笑って答えた。

「あのな、こいつ非常時にはちゃんと対処法があんの！ 」この街には魔物を撃退する自警団があんのっ！」

「自警団って言葉、こっちにもあるんだ……」

「なんか言った？」

燐はううん、と返して大通りの方を見やつた。遠くの方から大きな何かが駆け回るような音が聞こえてくるが、それ以外は静かで人々は一応避難したのかほとんど人はいない。

「さて、じゃあ俺らも行く？」

「は？ どこ行くの？」

「どこって、魔物のところに決まつてんじやん」「

なに当たり前のことを聞いてんの？ といった風なリアンの言葉にカイルが説明を続ける。

「魔物は自警団が仕留めるのになぜ行くのかといいたいんだがう？」

「うん」

「殺された魔物の皮をはいで、油を取り出すんだ。急がないと消えてしまうからな。魔物の油は良し悪しもあるが、それなりの値段で売れるし、はいだ皮は魔道の筋のものに売ればまあ足しにはなる。だから暇なものは自警団が仕留めた後、見つからないようにしながら必要なものを取りに行くんだ」

「ふーん」

「と、いうわけで……行くぞっ！」

「うわっ、やめろリアン！ ！」

「なに！ ？」

いきなり何をしたのか、三人は気づいたら魔物たちのど真ん中に

いた。

「おつまえ……、術を使つただろ？！」

「そう、怒んなつて。あ、燐ちゃん大丈夫？」

「うえつぶ、き、気持ち悪い……」

「わーつ、吐かないで！」

のんきに騒いでいるリアンと燐を見て、カイルはため息をつく。

「おい、ここがどこだか忘れてないか？ 周りの魔物たちがじりじりと距離を詰めてくるんだが……。しかも多くないか？ 誰も一匹とは言つてなかつたが、これはさすがに多すぎるだろ？」

「何かに惹かれてきたんじゃないの？ たとえば、普通ではないイレギュラーな存在とか……ね」

一瞬まじめな顔になつたリアンとカイルが、燐を見やる。燐はといえば、初めて見た魔物をまじまじと見ていく。

「……とにかく、ここに倒すぞ」

「あいあいさー」

すつ、と立ち上がつた一人を見る燐の目は、私はどうすればいいの？と語つている。ような気がしたカイルは、ここに待つてろと言ひ置いて魔物の大群の中に突つ込んでいった。

リアンはといえば、こっちも燐に見つからないようにドーム状の膜を張つた後にそのままカイルと同じように魔物たちの中に突つ込んでいった。

「えーと？ わたしはいつたいどうすれば……。ていうかこの膜なんだ？ なんかふわふわしてる」

試しに指で勢いよく突いてみると破れずにそこだけ外へと飛び出し、指を外すと元の形に戻つた。

まあいいやと思ひながら周りを見渡すと、次第にそこかしこで爆発が起きるようになつた。それに目を見張つてゐるうちに、今度は異様に魔物がバタバタとまるでドミノ倒しのように倒れていく。

「あのふたり、何やつてんの？」

しばらく経つと立つてゐる魔物はいなくなり、たくさん魔物に

囲まれて立ち死んです一人が田に入つた。

「終わったよー」

「」やかに言つコアンとは別に、剣についた血をふりておとした
カイルが疲れたよつて言ひ。

「守りの膜を解いてやれ。出らんないぞ」

「ついーっす」

手を横に動かしたリアンは、暇だつた?と聞いてきた。

「うん。すつごい暇だつた。ていうか一人ともすごいね! あつと
いう間だつたじやん! うわー初めて見た、魔法とか剣とか。うわ
ー、うわー、すごいつー!」

初めて見た魔法や剣に大はしゃぎする燐に言ひ。

「そんじや、俺らいいろ拾つてくるから、もう少く待つて?」

「あ、うん!」

再び離れていく一人を見送つて、燐は魔物たちのたくさんのが
に向き直る。

その田には、さつきまではしゃいでいた光がなかつた。そのまま
しゃがみこみ、誰に言つてもなく呟く。

「なんかさ、死んじやつた君たちを見てもなんとも思わないのはな
んでだろ? わたしのなかでは、君たちは虫とかとおんなじな
のかなー」

ブツブツと呟く燐を、一人は見ていた。もちろん手は動かしてい
た。

「なあ、今さらなんだけどやー。どう思つよ、燐ちゃんのこと?」

「普通の子じやないか? 剣とか魔法とか見てあんなにはしゃいで
たんだから、よほど平和な世界から來たんだろ?」

「そういうことじやなくつて……」

じゃあなんだと聞かれると答えられないが、そういうことを聞き
たいわけではなかつたのだ。

しかし言葉に表せないため、まあいつか、と心の中で血口完結す
る。

「おい、さつさと終わらせるか」

「わあってるよー」

ふざけた態度のままのrianに、カイルはため息をつく。
(rianは、本気になればすごいんだがな……)

少し疲れたカイルは、腰をつかんで後ろに反り返る。

さかさまになつた世界のなかで、魔物の亡骸のなかに一人しゃがみこむ燐の背中が寂しそうで、それがひどく印象的だつた。

10話 韶く歌、美しき舞（後書き）

燃せりゆふ子なんじょいね

11話 眠りのひ、誘い。

「……あ～ん～た～た～ち～」

やつと帰ってきた燐たち三人は、マルサフの地底から響くような声に出迎えられた。

「いったいなにを考えてるんだい！ 魔法が使えない燐を魔物の群れの中に連れてくなんて！！」

「うつせーな。だいたい俺らがいて怪我させるかつての！」

怒るマルサフについて反抗的な態度で言い返してしまったリアンに待っていたのは、マルサフのフライパンと怒鳴り声が織りなすお説教という名の恐怖の舞踏会だった。

「いでででで！ ちょ、やめろーっ」

とりあえずマルサフのお説教はリアン一人に受けてもらうことにして、疲れきった燐とカイルの二人は自室にもどって休むことにした。

「場所、覚えてるか？」

「ん。大丈夫だよ、またあとでね。リアンが帰つてきたらお疲れ様とでもいっといで」

「気が向いたらな」

背を向けて歩いていくカイルを見送つてから、燐も歩き出す。多かつた魔物の皮をはいだり、油をとつたりしていたら思ったよりも時間をくつてしまい、廊下の窓から差し込む明かりは夕暮れの色をにじませていた。

部屋に入った燐は、そのままベッドに寝転んだ。

「つつかれたー……」

疲れ切つた体は、横になるだけで眠気を訴えてきた。

(朝、早かつたしなー。……そういえばリアン、大丈夫かな。大丈夫だとは思うんだけど……ま、いいや)

燐は襲い来る睡魔に身をゆだねた。こうこう時は寝てしまうに限

る、とよく分かっている。

沈んでいく意識の中で、リアンとカイルの悲鳴とマルサフの怒声が聞こえた気がした。

？ ？ ？

ドンドンドンッといつ何かを連続してたたく音に燐は目が覚めた。
「おい、寝てんのかー？」なんか誰だか知らねーけど『お前に会いたい』って奴が来てるぞ』

のんきにいうリアンの声に、不機嫌な声を返す。

「……はあ、うつさいんだけど。リアンのせいで起きたりやつたじゃん。まつたく、もうけよつとしたら下降りるから、ちょっと待つてもうつてー」

部屋に入るなりベッドに直行した燐は、結局縁のサリーもじきを着替えずに寝てしまい、おまけに着替えもおばばが持っているためドレッサーの鏡を見ながら手櫛で髪とサリーもじきを整えて部屋をでた。

廊下を歩いていくと、階段の踊り場から一階を見渡した。

「どこにいんの……？」

夕方になると宿をとろうとする旅人達で街の宿は盛況で、『『『旅宿』も賑わっていた。

しかしそのせいで、どこに誰がいるのか非常に分かりづらく、声をかけられてもときおり起ける大きな笑い声などでけして聞こえないだろう。

さて困った、と考えていると階段を上つてくる三つの人影に気づいた。

「おー、やつと来たか！ あはは、遅いぞー」

フラフラで語尾に が付きそつなほど陽気なリアンと、それを支えるカイル、その後ろには軽鎧けいよわいを着た見たことのない女性が立っていた。

「リアンビしたの……って、べべべー！ 酒くセッ……なに、ここ
つ酔つぱらつてんの！？」

「ああ。……ほら、起きろリアン。起きるつ！」

「ん~？ あははは、カイルと燐の顔がぐるぐる回つてるー。一人
とも何やつてんのー？」

「おつまえを、介抱してやつてんだろー！」

キレたカイルがリアンの頭を殴つた。ゴシン、といい音がしたな
～と思つた瞬間、リアンが泣き出した。

「うえええええん、カイルが殴つたあああああー！ 痛いよーーー！」
「えつ泣くの！？」

「あなた、子供じゃないんだから……」
いきなり泣き出したリアンに驚く燐と、その隣で呆れたふうの女
性は顔を見合わせた。

「あたし、サラ。よろしく」

「わたしは木崎燐です。よろしくお願ひします」

ちょうど挨拶を終えたその時、リアンが絡んできた。

「ねーねー。カイルがイジワルしてくるー」

「はいはい、ちょっとあっち行つてろ」

そういうて押しやると、「ぶー。燐のケチーー」と言つて入るみ
のなかへと消えて行つた。

「……で。わたしに用があるつてのは、あなたですか？」

「ええ、そうよ」

「どういったご用件ですか？」

燐が聞くと、彼女は答えた。

華々しく美しい微笑みとともに。

「あなた、あたしのところに来てくれない？」

「

……

豈
?

11話 眠りのひ、誘い。（後書き）

イメージ的にはサラは華々しい女性です（笑）

1-2話 サイの話（前書き）

今回ちょっと短いです。

「……つまりサラたちの泊まっている宿で一緒にバカ騒ぎがしたい、と。いうわけですか？」

やけに長々と説明された理由を頭の中でも要約すると、『いつの宿に遊びに来いよ』となつたので、それを伝えてみるとサラは満足げに頷いた。

「そう、そうよ！ こんな酔っ払いとうつるといヤツのことは置いといて、今夜は私たちと一緒にガールズトークしましょ……」

説明している間、喉がかわいたのかまるで水を飲むようにアルコール度の高い酒をぐびぐびと飲んでいたサラは、すでにその顔がうつすらと赤く染まっている。

そのせいかやけに上機嫌なサラのテンションについていけずにカイルたちの方を見ると、カイルも呆れた風に溜息をつきながら首を横に振った。

「そいつの言ひてることはあんまり気にすんな。おい、サラ。お前もさつさと宿に帰つて寝ろ。お前絶対酔っぱらつてんだろ」

「ん~？ 酔っぱらつてなんかいっませ〜ん！！」

語尾に『』が付きそうなほど上機嫌なサラに、酔っ払いはみんなそういうんだよ、と言い返した。

「それに、あまりに帰りが遅くなると……アイツが、くるんじゃないか？」

「え？ アイツ？」

首をかしげる燐とは裏腹に、サラの顔はサアアアアツと青ざめていく。しまいにはカタカタと震え始めたサラは、世の終わりだとでもこゝかのように口を開いた。

「……そ、そうね。今日は、帰るわ。あ、あの子が来たら、私の人生が終わってしまうもの。じゃ、それじゃね！ 燐ちゃん！ この話はまた今度！」

そういうが早いが、サラは足で駆け足で出て行ってしまった。

「ねえ、『アイツ』って誰?」

ウェイターが持ってきたバケツに吐き始めたリアンの背をさすりながらカイルがあいまいに答える。

「んー……、まあ、サラが何か面倒事をおこしたとき元へくる鬼だ。

そのうち知り合つだらう」

今は説明する気がない、とでも言つかのように再び視線をビームかへと向ける。

「あ、おい! こいつのこと見といてやつといてくれないか?」

カイルが声をかけたのは、『ボンッキュッボンッ』という言葉がよく似合う体に肩を大幅に露出した女性だった。

「うふ、いいわよ? ジャあわたしの方で預かっておくわね」

そういうとその女性はリアンの肩を支えるようにして立たせると、そのままどこかへ連れて行つてしまつた。

「さて、俺たちはもう寝るか」

「あ、うん。ていうか、いいの? ほつといて」

「気にすんな。あつちはあつちで好きにやるだらうせ」

なんだか違う方の意味に聞こえた気がしたがスルーしてカイルとわかれた。

(つかれたなあ……。早く寝よ)

部屋に入つてそのまま寝ようとしたが、なにか着替えるものはないか探し始める。着替えるものがなくてそのままの格好でいたため、借りた衣装のままだつたのだ。

大きなクローゼットを開けて探すと夜着が見つかったのでそれに着替える。

「やつと、寝れる……」

燐はベッドに入ると襲つてきた睡魔に身をゆだねた。深く深く、

泥沼のような眠りの中へ沈んでいく。

思ったより疲れていたんだな、とまるで他人事のように思つたの

を最後に、燐の意識は閉ざされた。

13話 真夜中の訪問者

パリーンーとこう何かが割れる大きな音がして、燐は目を覚ました。

音のした方 バルコニーに通じるガラス窓のほうを見ると、黒い人影が立っていた。

「……だれ？ 不法侵入で訴えますよ」

「……」

燐が問うても答えないそれは、ふら、と揺れたと思つたらそのまま床に倒れた。

「はあ……。なんでこんなことになつたんだろ？」

とりあえず倒れたのをそのままにしておけず、備え付けの長ソファに運んだ。

顔を覗き込むと、肩につく程に伸ばされた髪に包まれた細い顔、長い睫まつげ、スウツと通つた鼻筋、薄い唇……要するに中世的な顔立ちで、燐は思わず「本当に男？」とつぶやいた。

「……失礼だな」

「うわっ、ごめんなさい……！」

突然氣を失つたと思っていた相手から声をかけられ、燐は驚きながら謝つた。

「……つて、男の人？」

「そうだが」

ムクリ、と上体を起こした男はそのまま室内を見渡した。

「……ここはどこだ？」

「ここは旅宿っていう宿、そういうえば名前まんまだな……。つて、そこはどうでもよくつて、あんた誰？」

「私は……シャザ。シャザと呼べ」

変な間があつた気がするなど考えていたら、シャザはせつねと立ち上がりて部屋を出て行こうとしていた。

「わよー、あんたどこからでこいつをしてるのよー？」

「どうして、窓だが」

「ああそなうの来たとこから戻るのー、と心の中で叫んでいぬと、シャザが何かを投げてよこした。

思わず手でキャッチするとチャリ、ともキン、とも取れる音がした。

「なにこれ……袋？ つて、金貨！？ と、指輪？」

訊きながら袋を開けると5枚ほどの金貨と鎖に通されて首にかけるようになつている指輪が出てきた。

指輪をつまんで円明かりにかざすと、指輪についたシンプルな縁の宝石がきらりと美しく輝く。

「金貨は口止め料だ。今夜私がここにいたことを誰にも言つな。親しかろうが親しくなからうが、だ。その指輪は、もつひと円もたたないうちに必要となるだろう。肌身離さず身に着けておけ。風呂に入るときだらうがなんだらうが外すなよ」

「言つだけ言つと勝手に外へと飛び降りたシャザに驚く。

急いでバルコニーの手すりに近寄り下を見るが、そこには誰もいなかつた。

「こ、そんなん低くないよねえ……？ しかも人つ子一人いなつて……お、お化け！？ 幽霊！？」

異世界にも幽霊がいるなんてえええーーと叫ぶと、少し恐怖心が薄れた。

よく考えたら幽霊なんてものはいないのだ。

そう、シャザは生身の人間。自分がこのソファに運んだし、その時もちゃんと重かった。幽霊だったら重さを感じないはずー、と自分を無理やり納得させる。

「……よし、寝よう。寝るのが一番。つて、これかけとかなきやなんだつけ」

もうどうでもなれ、と寝ることにした燐は、シャザにもうつた
指輪を首にかけてベッドに横になつた。

(なんだか、この世界にはキャラが濃いっていうか、変な人が多い
気がするな)

そんなことを考えていると眠れなくなりそつだつたので、目をつ
ぶつて何も考えないようにする。

そのままジッとしていると、燐はいつのまにか寝ていた。

14話 リアンの末路（前書き）

いつもお読みくださいありがとうございました
評価・ポイント・感想、嬉しいです！
まだまだダメダメなわたしですが、これからもどうぞこの小説をよ
ろしくお願いします！！

14話 リアンの末路

朝になり、田を覚ました燐は真っ先に胸元を確認した。そこには首から延びる鎖と、そのさきで揺れる銀色の輪と田に照りひかれて輝く縁の宝石があつた。

それを確認した燐は、「はああ～っ」と盛大にため息をつく。「……アレ、だ。なんか異世界にいたらこういイベントって当たり前つてことだ……よね?」

面倒なことにならなきやどりでもいいや、な燐はさつわと着替えてカイルの部屋に向かつた。

「おーい、おはよう! 起きてる?」

「お前の声で起しそれたわ……。あのな、ノックくらいしろ」

『怒る』を通り越して『呆れ』の表情のカイルに、燐は申し訳なれやうに笑う。

「うん、じめん」

「ああ。……つて、お前そんな指輪首にかけてたつけ?」

「えつ」

しまつた!、と思いつと同時に自分の不注意さに穴を掘つて埋まりたくなつた。

シャザは自分のことを人に話すなと言つて金貨と指輪を置いて行つたのだ。それ以上なにもしなかつたということは、話したらすぐ自分と話を聞いてしまつた人たちのことを始末できる、ということだったのではないか。

そこまで考えた燐は頭の中で必死に嘘を紡ぎあげた。

「じ、つはね~? 昨日あたし達の歌と踊りに感動した幽霊が『これどうぞ』つていつて置いてつたんだよ! あ、そういえば昨日おばばに借りた衣装を返すの忘れてた!! 返してくるから、またね

つ

「そういってはたから見ても怪しいと感じじる燐は出て行つた。

一人ポツンと部屋に残されたカイルは去つて行つた燐の背中に、「……結局、何しに来たんだ？」と、呟いた。

？ ？ ？

「はあ、はあ、はあ……つ。あつぶなかつた！」

自分の行動が不自然なことは分かつていたが、あのままだと言つてしまいそうだとthoughtので逃げてきた燐は部屋のクローゼットに仕舞つておいた衣装をおばばに返すために衣装を持って一階へと降りた。

「あ、おばば～、それにマルサフさん！　おはよ～！」

「おはよ～、よく眠れたかい？　待つてな、今朝食を出すから」

「ありがとう～！」

「おはよ～、おばば～！」

「おお。しかしカイルはまだ降りてこぬか。リアンはどこぞの女に連れて行かれたようだの、まったく情けない。いや、それ以上に酔っぱらつて女どもを闇に誘つておつたそうではないか。まったく、女を追いかけますのも大概にしろといつも言つて聞かせておるじやろうに、あやつには耳が付いておらぬのか。いやむしろついている耳は飾り物か……」

燐から衣装を受け取りつつ言ひ出した言葉が次第にリアンに対する小言になつていいく。

燐が苦笑しながらマルサフが用意した朝食を食べていると、問題の一人がそろつて降りてきた。

「いや～、昨日の女性はもう美しうぎて目がくぎ付けだつたよ！

しかもあの性格。まさにオレの女神……」

「おい、その辺にしておいた方がいいぞ」

「なんだよ、のろけられていやになつたか」

「ああそうだよ。それより、お前のために言つてるんだからな。今すぐその話題をやめるべきだ。後悔するぞ」

「もー、ひがむなよ。まあ仕方ないよなあ、俺つてもちゅうから、

な……って、うげ！　おばばっ！？

カイル相手に上機嫌に喋っていたリアンは、おばばの姿を見て固まつた。

「ほつ……？　ずいぶん機嫌がよいの？、リアン？」

「い、いや違うんだ！　これには海よりも深く、空よりも奥でしない理由があつてだな」

「つべこべ言うな！！　そこに直れ。今日とこいつ今日こいつはお前のその腐つた性根を叩き直してやろうつ！！」

「ひ、ひえええ～！！」

悲鳴をあげて逃げ惑うリアンにおばばが持つ杖の先から飛び出した光が襲う。さらに悲鳴を上げるリアンをよそに、カイルは燐の隣に座つてマルサフに朝食を頼んだ。

後日流れた噂話では、部屋の隅で水の入ったバケツを両手に下げ頭にも載せ、さらにつま先に漬物石が置かれて必死の形相になつているリアンの姿が目撃されたそうだ。

1-5話 買い物と夢話（前書き）

今回すみじやく短いです。

15話 買い物と噂話

それはお仕置きを受けている真っ最中のリアンを除いたカイルと燐がマルサフに言われて買い出しに来ていたときだつた。

「おい、聞いたか。また隣国の王族が精霊に無理やり契約を迫つたそつだぞ」

「聞いた聞いた。つたぐ、バカだよなあ」

「でも仕方ないんじやないか？ 隣国は、精霊とはあまり関わりがなかつたんだろう？」

人が賑わう市場を、隙間を抜け、ぶつかつて謝り、大きな声で寄つて行けと出店からの声を笑顔でごまかす。そんなときふと聞こえてきたその話し声は、あつという間に聞こえなくなつてしまつた。

「ねえ、カイル。精霊と契約するのつてそんなに大変なの？」

「なんだよ急に。……まあでも、けつこう大変らしいぞ？」契約つていうのは精霊が気に入った人間と交わすものだからな。人間が無理やり交わしたつて、精霊が嫌がついたら力なんてあつてないようなんだ」

流れる人ごみに逆らい、横の店へと近づいていく。燐はそのあとを見失わぬようについていく。

「おい、この紙に書かれてるものを全部くれ。……契約つてのは、信頼の証みたいなものだ。この人間なら自分の力を貸し与えても悪用することはないだろう、ってな。精霊と契約しての人間なんて、めつたにいない。昔はたくさんいたらしいが」

「これもどうだい？」と差し出してきた何かの葉も「もらおう。全部この袋に入れてくれ」と言うと、カイルは少しかがめていた背を伸ばしてふうっと息をついた。

「どういうこと？ 昔はたくさんいたつて、今は？」

「それだけ精霊が信用できる人間が少なくなつてきてることじゃないのか？ 遥か昔にはたくさんの精霊と共に存していた時代も

あつたらしいが……」

品物が入った袋を受け取り、代金を払ったカイルは「行くぞ」と声をかけ歩き出した。朝というには少し遅く、かといって昼に近いわけでもない時間にもかかわらず、市場は人でにぎわう。むしろさつきよりも多くなってきているんじゃないかとさえ思わせた。

「ふーん。カイルって神話とかに詳しいの？」

「いや、この世界の住人ならば誰でも知っているんじゃないのか？」

俺は小さいころに母に読み聞かされた」

カイルの後をついていく燐は人にぶつかることもなく歩いていたが、ふと目に留まった店に行きたないとカイルを引っ張つていった。

「おい引っ張るな。……つて、なぜ食いもの屋に」

「ふ、歩いたらお腹がすぐだらが！！ つーわけでカイルさん、おごってください」

命令しているのかお願いしているのか分からない口調で言つ燐にカイルはハア、と溜息をつくとチーズを練りこんだパンを一つ注文した。

「つたく、なんでこいつなる

「はは、わたし空腹には勝てないんだよね」

「さつき朝食食べただろうが」

と言うカイルに「それとこれとは別！」と言い返した燐が耳にしたのは騒々しい怒鳴り声と人々の悲鳴だった。

16話 買い物と噂話、その2

声のする方へと目を向けると人だかりができるおり、その人の多さにつられて覗き込む人もいた。

「おい、どうしてくれんだ。ええ！？ 見る、オレの服が汚れちまつたじゃねえか！」

「す、すいません。すいません」

人々の見つめる先にいたのは、体格のいい三人の男と、それに一人の少女だった。一人は謝つているがもう一人は知らぬ顔で空を見上げている。

「すいませんじゃねえよ、オレの服どうすんのかって言つてんだよ！！」

「汚れた服をどうするのかもわからないの？ あんたの脳、頭蓋骨の中でカラカラ言つてぐるぐる回つてんじゃないの」

ハツと笑つて燐が放つたその言葉に、そこにいた全員が凍りついた。

なぜ、問題を起こそうとするのか ！

カイルはため息をついた。燐はリアンと同じぐらいに、もしくはそれ以上に取扱いに注意しなければ。もう起こそつてしまつたことだから仕方ないが、終わつたら一度と挑発するようなことを言わないよう約束させたほうがいい。

「……今、なんと言つた」

「耳も遠いんだ。救いようがないね、あんたら。あんたたちでもわかるように言つてあげるから、耳の穴かっぽじつてよおおおおく聞きなさいよ」

カイルがこの後のことを考え、軽く現実逃避に入りかけ油断している間に燐は挑発する言葉をもう一度凍りついた空気の中に投げ入れた。

「あ・ん・た・た・ち」

そこですうつと息を吸い、最後に力強く言い放った。

「ばあつかじやないのーー？……って、言つたんだよ、このグズ

！！」

普段の燐からは考えられない暴言にカイルは固まる。それと同様に、集まつた人々、その人々の視線を受ける三人組も固まり、まるで放たれた言葉を『皆一緒に理解しようとしていますよ』とでも言わんばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7369s/>

私と君と異世界と

2011年11月26日18時47分発行